

台風二十三号の教訓

但東中学校 二年 大岸 寛之

約一年前の十月二十日、僕の住んでいる兵庫県北部を大型台風が直撃しました。奇跡的に僕の家は無事でした。しかし次の日、出石に住む親戚の家を見に行くと堤防が決壊していて辺りは湖か海のようにでした。

その日から一週間僕は復興作業に加わることにになりました。

その作業はたいへん厳しいものでした。泥が床一面にまるで絨毯のようにしきつめられていました。まずそれを取り除いてから床の板をはずしました。洋室はまだよかつたのですが、とくに和室の掃除は大変でした。畳は水を吸いこんでいて大人の男六人がかりでやっと運べる重さになっていました。トイレは二日目からできた仮設トイレで、その周りには、蒸し暑さによつて臭気が漂っていました。そんな中での一週間でしたが、色々どやっ

て良かったと思うことがありました。それは、
今まであまり体験したことのない本気で協力
しあって作業をし、達成感や充実感を得ると
いうことです。またどんな困難なことにぶつ
かった時にも、協力し合うことの大切さを知
ることができました。それらは、日常生活に
も深く係わっていると思います。

今、世界中で災害により困っている人々に
は僕達のカが必要です。そしてその人たちの
手助けをするということは、実は僕達自身の
心を育むことにつながります。だから僕はボ
ランティア活動や募金などには積極的に参加
しようと思います。台風二十三号の体験から
僕には、本当に支援したいという気持ちがあ
わいてきました。

台風二十三号は僕達に様々な教訓を残しま
した。人は協力できる。また協力しなければ
ならないということ。そして人は協力するこ
とでどんな時にも、どこでも、どんな障害に
だって立ち向かうことができるというこ